

松井梓『海と路地のリズム、女たち——モザンビーク島の切れては繋がる近所づきあい』

■出版地：横浜市 ■出版社：春風社 ■出版年：2024年 ■頁数：338頁 ■定価：5,000円＋税

竹内 愛*

本書は2022年に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出された博士論文を基にして刊行された民族誌である。調査地はアフリカ東部のモザンビーク共和国の大陸部沿岸と3キロメートルの橋でつながっている（南北約3キロメートル、東西500メートルほどの）小島「モザンビーク島」。その島は「かつてはポルトガル領東アフリカの中心拠点として栄えたせわしない島だったが、今では時間も現金も漁業を中心にゆっくりとまわる」。島の北半分には欧米人や比較的富裕な層が居住するが、調査対象地域は低所得層が住む南半分の「バイロ」である。そこは「一見スラムのように過密なのに、おそらく国中のどこよりも治安がいい」場所である。著者は、そうした地区の一家族を中心に、「半径20メートルの日常で繰り広げられる実践」として女性たちの日々の暮らしと会話（ゴシップ）に着目し、その社交のあり方について論じた。

著者は、2017年から2020年まで毎年、計10か月半「バイロ」の女性たちの間で現地調査を行った。2回目の調査で、女性たちの日常的に付き合う人間関係が変わっていることに驚き、その「関係の流動性」に強い関心を持った。日常生活の微細な側面の詳細な記述をつうじて「本書が目指すのは、女性たちの関係の緊密化と緊張の波や、濃密ながらも風とおしのよい島の近所づきあいが、いかに成り立っているのかを示すこと」であり、それは「マリノフスキの『現実の生の付加量部分』を、具体的な語りや事例、データを用いて（不可量なものをときに定量化さえしながら）可能な限り記述する試み」（本書：5）である。

本書の真骨頂は、読者が、島の流れる時間のリズム、空間を共に体験しているかのような錯覚にも陥るほど

の、厚い記述である。女性たちは、隣人たちとおしゃべりし、食べ物のやり取りを通して、日常的に親密な付き合いをしている。隣人との食べ物のやり取りは、モザンビーク島の習慣であり、周囲3軒程度という狭い範囲で行われる。

女性たちは、手持ちの現金がなく食べ物を手に入れない時、隣人との間で駆け引きをする。直接相手に食べ物を「乞う」こともあるが、それにまつわる「ゴシップ」をできるだけ生まないように、相手からの再分配の申し出を引き出す術を身につけて、したたかに生きている。一方、今日食べる物が無い家族に、家族全員分ではなく、子どもの食べる分だけを与えるなど、ある程度ドライな関係性を保って世帯間に境界を引いている。食べ物を分けてくれた相手に対して、お返しがきちんとされていないと認識される場合には、それが「ゴシップ」となって、関係に亀裂が入り、それまでの濃密だった近所付き合いは、あっさりと「切断」される。著者が注目するのは、とくに、この「切断」である。

隣人たちは、「ゴシップ」の内容の真偽には執着せず、「ゴシップ」は日常的に生まれては消えていく。しかも、近所付き合いが非常に狭い範囲であるバイロの人間関係では、その噂話は、広範囲に広がることはない。女性たちはそのことをよく知っており、数十メートル離れた場所に引っ越し、また次の隣人と食べ物のやり取りを通してそこで新たに親密な関係性を築くといったことを繰り返す。著者は、この彼女たち特有の「切れては繋がる」近所付き合いを成立させた背景として、島の歴史、漁業で成り立つ島の経済によって作り出された時間のリズムや居住空間などの諸要素も厚く記述

松井梓『海と路地のリズム、女たち——モザンビーク島の切れては繋がる近所づきあい』

* 南山大学

し、それが日常的な近所付き合いの関係にどのように作用しているのかを描き出す。

本書の構成は以下の通りである。

目次

はじめに	変転する関係に触発される
序章	繋がることと切り離すこと
朝	
第一章	モザンビーク島という舞台——環境、歴史、社会、女性
昼	
第二章	居住空間の形成史、空間の特徴と近所づきあいのリズム
コラム	路地を自在に選んで歩く
第三章	海がもたらす時間性——変動と確実性のリズム
晩	
第四章	誰と住まい、誰と食べるか——住居内での食のやり取り
第五章	濃密な関わりあいとその変転——親密さと摩擦を行き来する
第六章	ゴシップの渦中で共在する
終章	受け流すこと、委ねすぎないこと
あとがき	
参考文献	
索引	

次に各章を概観する。

序章において、著者は、アフリカ地域研究の「関係のなかにある〈個〉のあり方」の議論を提示し、本書が描くモザンビーク島の女性たちの関係をアフリカ研究に位置づけ、情動的な共振と儀礼的な切断のあいだを行き来する事例として提示している。

第一章では、モザンビーク島の空間や景観の時間性、住民性の変転の歴史を示している。島は、古くから交易拠点としての地の利を求め、様々な人が移入・移出した非連続的な過程を経ており、現在の島の居住空間の特徴はその歴史的背景による。島は、北部のシダーテ（ポルトガル植民地時代に繁栄した旧市街）と南部のバイロ（低階層の人々が居住する地域）に分かれており、バイロでは碎石によって低くなった土地に家々が稠密に並ぶ。内戦等を背景として大陸から人々が大量に移入してきたが、移入者に住居の空き部屋が賃借されている。そのため、1軒の住居にはたいい複数

の家族が同居する状態である。

島にはマクア・ナハラと呼ばれるポルトガル人、インド人、アラブ人との混血の進んだ住民が居住している。マクア・ナハラは元々沿岸部の混血の人に対する蔑称であったが、現在は文明化された民と意味づけられ、誇りを持っている。島生まれでも、移入時期が多様であり、人が流動的な土地であるために、権威的な存在や組織構造が存在せず、平板な社会構造となっている。

バイロには「夫の義務は妻と子どもを養うこと、妻の義務は夫に服従すること」というジェンダー規範があるが、女性たちは夫にただ服従しているのではなく、夫の稼ぎが少なければ、商売をして家計を支えている。女性は「家族に食べさせる主体的な存在」であり、食べ物が無い時は、隣人や友人、周囲の男性を頼り、強く主体的に生きている。

第二章では、バイロの居住空間の構築された歴史背景と住居の特徴について整理している。バイロは、独立や内戦などを契機として対岸から幾度もの人口流入があり、人口の多くは入れ替わった。今日人びとと絡み合う空間は「不連続な総和の現在」である。居住空間にあるかつての統治や管理のための空間が備えていた見通しの良さ、空間の均質性、行き来の自在さなどの機能は、そのまま残されている。そのような居住空間の構造のおかげで、バイロには隣人に意を払いながら距離を調整できる空間がある。賃借人にとっては、周囲に点在する空き部屋が、その役割を果たす。バイロには関係を繋ぎ、切断し、再び繋げるリズムが流れている。

第三章では、モザンビーク島には天候によって不漁であってもいつか豊漁となる「確実性のリズム」が流れており、女性たちがそれに影響を受けながら食物授受をする姿が描かれる。島では漁業の利益が島の経済全体に直結している。不漁の時期には島全体の経済活動が滞り、現金の動きが止まるため、家賃などの期日の支払いがある場合でも、豊漁の時まで待つなど、融通し合っている。

確実性のリズムに合わせるように、その日暮らして生計を立てる女性たちのあいだでその日の不足を埋める食べ物の授受は繰り返される。女性たちの食べ物のやり取りには、「交換」、「乞う」、「分配を引き出す」の3つがある。「交換」は、隣2～3軒以内のごく近所に住む相手であることが多い。交換する関係が築かれていると、自分の生活が苦しい時、相手に「乞う」

負い目を感じることなく食べ物を得ることができる。

女性たちは自分に手持ちの現金がなくて食材を手に入れない時には、料理や食材を親族か近くの隣人に「乞う」こともあるが、食べ物を「乞う」た際、あるいは、食べ物のやり取りに不均衡が生じた際、関係の緊張や悪化に至ることが多いため、極力、「相手が自発的に食べ物を分配」してくれることを期待するのだという。自分で「乞う」てしまうと関係の悪化や「ゴシップ」につながるために、隣人とのあいだで直接的な乞いを避けて駆け引きがなされる。食べ物に困っているときには「乞う」ことと、「分配の申出を引き出す」ことで、食べるものを確保していく。パイロでは、食の授受によって親密な隣人関係を築いては、「ゴシップ」によってその関係を「切り離す」ことを繰り返すことによって、海のリズムに人々の生計が影響されるパイロの社会関係はバランスを保っている。

第四章では、家の中での食の授受と近所との食の授受について記述している。島では、一つの住居の中に3核家族以上で居住するケースが過半数を占めている。共住相手として、母や姉妹、その他の母系リネージ内の親族が選好されるが、非親族も共住相手として重要な位置を占めている。食べ物の共有は、共住者との関係性によって、食材を共同購入する場合もあれば、相手の分まで調理する場合もあれば、食べ物を交換するのみであったり、交換しない場合もある。家の中での食のやり取りの関係は、転居を契機として解消される。

パイロでは、食べ物がなくて困っている隣人から「食べ物のお裾分けを期待する」眼差しを向けられると、その眼差しを向けられた方は、隣人の家族が食べるのに満ち足りた量の食べ物を提供するのではなく、その提供の量は「ある程度の配慮」に留まる。著者は、世帯と世帯の線引きが「ざっくりといい加減に」引かれているのだとする。

第五章では、食べ物の授受の具体的な事例や語りが提示される。著者は、女性たちが料理を日々お返ししたり、直接的な乞いを避けながら食べ物を得たり、他者と互いに一定の距離を保ったりすることに日々注意をしつつ、それが難しい時には相手の困窮を真に受けすぎずに受け流すといった身構えを「骨の折れる仕事」と呼び、「骨の折れる仕事」こそが、女性たちが毎日営む生活であり暮らしであることを明らかにしている。女性たちの食べ物の授受の方法は、日常的に、特定の相手との間で料理の盛られた皿をやりとりすると

いうものである。ただし、やり取りそれ自体や近所に住むために生じる摩擦によって、その相手は数ヶ月～1年ほどの短期間で組み変わるといふ。著者は、パイロの女性たちは強い心理的なつながりや固着した関係を求めすぎないからこそ、〈個〉として存在することができるのだと指摘している。

第六章では、「ゴシップ」に焦点を当て、女性たちのパイロで共住していくための身構えについて分析している。パイロでは、一つ一つの交際圏は小さく、関係が固着することなく常に組み替えられている。その交際圏のすぐ外側との付き合いは薄い。大都市のような希薄な近所付き合いでもなく、かといって農村社会のような親族関係や地域社会の規範に基づく固定的な関係性でもない。隣人への関心やつながりの希求と、関係性の断片化や流動性を同時に併せ持つ。

パイロでは、隣人同士は、それぞれの能力もニーズも似通っているために、人々間のコミュニズム的な感覚や関係は、互酬性や交換を求める態度に転化しやすく、「ゴシップ」は、相手は「これぐらいは返礼するはずだ」という想定とズレると生まれるのだという。著者は、パイロの女性たちが隣人と密に共存することを可能にするのは、自分が発したゴシップの手綱を握らず、他者が発したゴシップも真に受けすぎず、自らへのゴシップをも「放っておく」という、「いい加減さ」をも含む構えであるとする。

終章では、これまでの議論を踏まえて結論が論じられている。女性たちの「関係の切断」を分析すると、それは、意図や戦略、応答だけでなく、儀礼的な親密さや切り離し、諦めも含む、曖昧で複数の「切断」が併存しているのだという。パイロの女性は、他者とは親密に関係を築くけれども、決して集団に埋没することなく、時に悩み、失敗し、傷つきながらも、ドライに関係を「切断する」という手段でもって、〈個〉としての主体性を表していると結論づけて締め括っている。

モザンビーク島のパイロの女性たちは、近隣で日々生まれる「ゴシップ」に対して、そのひとつひとつの真偽は吟味せず、放っておくのだという。著者はこれを「儀礼的なコミュニケーション」と呼ぶ。他者や事象の完全な理解や「真実」を突き詰めず、曖昧なままにしておくことで、他者と共にあることを可能にする。それは他者に対する「寛容」の表れなのだという。著者は、このドライでいい加減なコミュニケーションこそが、モザンビーク島のパイロという土地での共生に

とって欠かせないと論じる。このような、島の女性たちが、ゴシップを固定化しないで受け流すこと、「切れては繋がる」近所付き合いの方法が、「共生」のもう一つのあり方として提示される。

本書の特徴は、著者自身が「はじめに」で述懐する、次の記述に集約されている。「白状すれば筆者の関心の根本は、この島と女性たちについて記述することにしかない。(中略) こうした記述の仕方には批判の余地も大いにあるが、一貫した理論的な枠組みや分析手法に島や女性たちをあてはめることや、議論の新規性を見出すことに魅力を感じなかった。加えて、島の事例は、何らかの地域研究の文脈に位置づけて比較をおこなうにはあまりに小さく限定された時空間のなかで起こる現象だった」(本書: 6)。地域の人々の生活や社会文化を「総体的」ととらえる従来の民族誌とは一線を画し、著者は「今日の人文学／人類学でも大きな潮流となっている」(本書: 18) 個人の行為や主体性を描くことに主眼を置いている。その点を踏まえた上で、本書の論旨に関して、いくつか気になったところを挙げておきたい。

まず、第一に、親族に関するものである。第一章で、マクアという「民族」の親族制度について、母系社会としてその諸特徴をまとめているが、第四章では、「母系リネージ」とともに「父系リネージ」が登場する。モザンビーク島は歴史的にみて、人口が非常に流動的であり、「伝統社会」とは異なる状況が推察されるが、二つの出自集団の存在に関する説明がほしいところである。また、共住するメンバー同士の関係として、親族／非親族の区分をして、詳細な量的データを提示しているが、女性たちの付き合いの仕方との関係性を知りたいところである。さらに、共住していない「近隣関係」において、親族／非親族の違いがどのようにあるのか(あるいはないのか)も気になるところである。

第二に、モザンビーク島の女性たちの食物交換に関してである。返礼義務が果たせない場合には、食べ物を与えた側が食べ物を返すことのできない相手の「ゴシップ」を語り、関係をあっさり「切断」とされているが、返礼がないと必ず「ゴシップ」を生むことになるのだろうか。むしろ、食べ物を一方的に与えることで相手の優位に立つことや良い評判を得ること(またそれを望む)というようなケースはないのだろうか。

岸上伸啓は、人がモノを与えたり手離すことに着目

した分配論を展開している。岸上(2016)によると、カナダ・イヌイト社会やアラスカのイヌピアット社会では、狩猟して獲得した獲物を親族や村人に分け与えるハンターは、良い評判や社会的威信を獲得しており、このこと自体が分配を続ける動機の一つとなっていると論じる。また、岸上(2021)は、狩猟採集社会における食物分配の機能と効果について、それぞれの社会の「人口規模」、「食物の分量」、「環境観・世界観」、(相手への分配の)「要求」によって異なるとしながら、次の5つに整理している。①「リスク分配機能」(食料不足のリスクの分配)、②「平準化機能」(個人間や家族間での食物の一時的所有量や消費量を平準化する)、③「社会関係再生産機能」(社会的紐帯を築く)、④「社会的名声獲得機能」(分配することで良い評判を得る)、⑤「優劣関係・負い目創出機能」(モースの贈与論の見解であり、与えられた側に負い目ができる)である(岸上 2021: 70)。岸上の整理に基づく、モザンビーク島の女性の近所付き合いでは①、②、③の機能と効果について確認できるが、④、⑤との関係はどうなっているだろうか。

第三に、本書では全体を通して女性に照準を当てており、ジェンダー規範については第一章で論じられるが、一方、男性たちについてはほとんど何も語られていない。女性の近所付き合いと空間や時間のリズムのあらゆる要素の連関について論じているが、男性との関係性についての記述もあれば、女性の生活をさらに浮き彫りにできたのではないだろうか。

第四に、地域における女性同士の相互扶助のシステムについて触れられていなかったが、そのあたりについても知りたいところである。

女性たちの付き合いに関して、補足的な考察を試みたい。(本書の参考文献にもあげられている) 人類学者のロビン・ダンバーは、言語によるコミュニケーションが男女で異なることを事例から指摘している。その背景として、人類の狩猟採集時代、男性が狩猟に出ている間、女性たちは、生活拠点に留まってそこで子育てなどを互いに助け合うという行為の中で、社交のための言語を発展させたのではないかと論じ、「女性がネットワーク作りに従事しているのに対して、男性は宣伝に従事している」(ダンバー 1998: 247) と男女の会話の違いについて論じている。ネットワークづくりによって、女性たちは、子育てのための適切な環境を作ることができる。支援ネットワークを得ることで、子育てに関する情報交換や実際にお互いの育児の

助け合いをし、精神的にも支え合うことができる。モザンビーク島の女性たちの親密な近所付き合いを考えてみても、「ゴシップ」も含めて情報交換をし、家事や育児を行う仲間としても共に支え合い、食べる物がなくて困っている時の円滑なセーフティネットとして機能している。ただし、島という特殊な環境の中で、その関係性はドライに「切断」されていく。それは、パイロの女性たちの持つ「強い心理的なつながりや固着した関係を求めすぎない」身構えであるという。

この「強い心理的なつながりや固着した関係を求めすぎない」身構えはどの社会においても有効なのか、モザンビーク島の流動的な社会とは相反する特徴を持つ評者の調査地であるネパールのパタンでの女性の付き合い方で検討してみたい。

カトマンズ盆地に位置する古都パタンには、マッラ王朝を築いたネワール民族が居住している。ネワール社会には独自のカースト制度があり、人々の生活圏は、基本的に同カースト集団内部での生活をしている。女性は夫の父系出自集団内で生活し、伝統的には親族以外との付き合いはほとんどなかった。そのような社会で、国際開発の潮流の下、女性自助組織がパタン各地で設立されるようになり、女性たちが家から出て女性自助組織のメンバーとして外で活動するようになった(竹内 2023)。女性たちは、自分の居住地域でグループに加入することになるため、基本的にメンバー間の付き合いを「切断」できる関係ではない。グループでは、メンバー同士しばしば話し込む。例えば、グループでの活動をどうするか、他のグループでの活動事例、地方行政からのお知らせなど、グループ運営に役立つ話題だけでなく、メンバーの個人的な話題の雑談も多い。メンバーの個人的な話題としては、子どもや夫の健康や家族のお金に関する問題が最も多く、投資話などのお互いの利益になる情報交換などもよく話題になっている。モザンビーク島の近所付き合いとは異なり、前提として、切ることでできない関係性の中で、親密に関わっていくためには、基本的には互いの利益になる話題が中心となる。ただ、ある意味で、「強い心理的なつながりや固着した関係を求めすぎない」という身構えについては、「切断」ができない代わりに、「本心を出さない」ということで、モザンビーク島の女性たちと同種の保身をしている可能性はある。同調しているように見せているが、〈個〉として生きるために、表面上だけ相手に合わせていると考え、モザンビークの女性たちの潔く関係性を「切断」するこ

ととは方法は全く異なるが、心のありようとしては、集団に絡め取られるのではなく、女性たちは依存し合いながらも〈個〉として生きていくことが可能であることが明らかとなる。

最後に、評者自身の日本での子育ての経験から考えてみると、「切れては繋がる」関係を繰り返すということは、身近な「ママ友」などの関係でも言えるかもしれない。ママ友同士は子育てという目的の下に、日常的に連絡を取り合い、一緒に子どもを遊ばせたり、子育ての悩み相談やさまざまな情報交換を行う。本心では過度に親密なつながりや固着した関係を望まない状況もでてくる。その場合、自発的な関係の「切断」は難しいが、卒園や卒業などの区切りが「切断」の契機となり、次の学校に進学することでまた新たなママ友との関係を築くことができる。モザンビーク島の女性たちのような「切断」とは違うが、学校制度の切れ目によってママ友と関係を「断つ」か「継続」するか、主体的に選択している。

パイロの女性たちの「強い心理的なつながりや固着した関係を求めすぎない」身構えというのは、その手法は違ったとしても、現代の私たちの社会においても、自分が自分であるために必要な身構えなのかもしれない。

著者は、水谷雅彦(2022)に依拠して、これまで倫理学が問い続けてきた「共生」の一步手前にある「共在」について論じている。「モザンビーク島の環境が身体や情動に作用するなかで生まれるのは、ゴシップや食のやり取りを含む過剰なコミュニケーションや社交だ。それは分かち合う喜びの情動に端を発してもいるが、同時に、情動的な繋がりや共振から切断された側面も強く併せ持つ」。それは過剰なコミュニケーションのなかでの主体としての人間の有限性に起因しているという。

本書は、人間の有限性を踏まえずに、理想形として「共生」のみを追求してしまう倫理観に対して、日常の厚い記述によって、もう一つの、「切断」をふくめた緩い社交のありかたを提示する。文化人類学、アフリカ地域研究を専門とする人だけでなく、コミュニケーションに関心を持つ人、また、(評者を含め)人間関係に失敗して落ち込むことがある読者にもぜひ勧めたい著書である。

参考文献

岸上 伸啓

- 2021 「狩猟採集社会における食料分配に関する比較研究——アカ、アチェ、イヌイットの事例を中心に」『人文論究』第90号、pp. 69-88。
- 2016 「第1章 贈与論再考——人類社会における贈与、分配、再分配、交換」『贈与論再考 人間はなぜ他者に与えるのか』岸上伸啓（編著）、pp. 10-39、

臨川書店。

竹内 愛

- 2023 『ジェンダーと災害の民族誌 変容する農民カー
ストとネワール社会』風響社。

ダンバー、ロビン

- 1998 『ことばの起源 猿の毛づくろい、人のゴシップ』
松浦俊輔、服部清美（訳）、青土社。

水谷 雅彦

- 2022 『共に在ること 会話と社交の倫理学』岩波書店。